



令和2年 2月

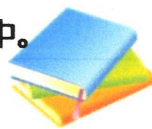


2/14 (金) の給食に  
ちなんで本を紹介します。

2/14の献立

手作りチョコチップパン、  
クラムチャウダー  
オリーブオイルサラダ、牛乳

紹介した本は  
学校図書館で展示中。  
借りられます！



## チョコチップパン → チョコレート

### 『銃とチョコレート』

乙一/著 講談社



2月14日の給食の献立は「バレンタインデー」にちなんでチョコレートが入ったパンが出ますね。今月の美味しいお話でもチョコレートが出てくる小説を紹介します。タイトルを見るとドキッとしませんか。「チョコレート」に並んだ「銃」という言葉。なんとなく不穏な感じですね。そう、これは、甘いだけではなく苦みのあるチョコレートの後味に似たお話です。

主人公はお父さんを亡くし、お母さんと二人貧しいけれどまっすぐに暮らしている少年リンツ。「移民」であることが彼らの上に重くのしかかっています。リンツはチョコレートが大好き。たくさんは買えないけれど、新しい商品をあれこれ想像して楽しんでいます。

大富豪の家を狙い財宝を盗み続ける大悪党ゴディバと、国民的英雄の名探偵ロイズの対決が世間で注目の的となっているなか、リンツは、お父さんが亡くなる前に買ってくれた本の中に、ゴディバの正体をあばく鍵となるかもしれない地図を見つけます。その地図が子どもたちの憧れの存在ロイズをリンツの元に呼び寄せ、思いもかけない命がけの冒険へとつなげるのです。事態は二転三転し、誰が敵か味方かわからない、ハラハラドキドキの展開になります。

すべてが終わったとき、リンツが思いついたチョコレートとは？もしかしたら食べたことがあるかもしれませんよ。そして登場人物の名前には気が付きましたか？ほかの人名にもゴンチャロフ、ブラウニーにガナッシュ等々。チョコレートがたっぷりなのです。

## 日本のバレンタインデーのはじまりはいつ？

2月14日のバレンタインデー、ヨーロッパの「聖バレンタインの日」が由来だというのはもう皆さん知っていますよね。「愛の日」とも言われ結婚の申し込みをしたり、大切な人に贈り物をしたりする習慣があるといえます。チョコレートに限定して贈るのは日本独自の習慣ですが、現在の形のバレンタインデーは戦後豊かになりつつあった1950年代にチョコレートメーカーの宣伝により広がっていきます。実はもっと前、神戸のチョコレート会社「モロソフ」が1936年2月12日に、神戸の外国人向け英字新聞に、バレンタインデーの贈り物にチョコレートをどうぞ、という広告を出して2月14日にお客さんをお呼びしていました。

『チョコレート物語 一粒のおくり物を伝えた男』(佐和みずえ/著 くもん出版)には、ロシア革命から逃れ苦勞して日本ではじめて本格的なチョコレート店を開店させたモロソフ一家の姿が描かれています。バレンタインデーの広告を思いつくエピソードも素敵です。

